

日本顔学会関西支部 第3回研究会「顔学の新たな可能性を探る」

日時：2019年7月6日（土）14：00～17：30

場所：武庫川女子大学 甲子園会館

2019年7月6日（土）、武庫川女子大学甲子園会館にて日本顔学会関西支部の第3回研究会が開催されました。今回の研究会は武庫川女子大学創立80周年記念企画の一環として、同大学薬学部の協力のもと開催され、60名以上の方にご参加いただきました。

今回は「顔学の新たな可能性を探る」と題して、これまでの顔学会ではあまり取り扱われてこなかった新しい分野として薬学からみた顔のお話、近年話題の新しい技術としてディープラーニングを用いた顔画像生成と解析、感性工学に基づいた化粧品開発のお話や、スマホアプリによる新たな顔体験の提案など、幅広いテーマを取り上げました。

いずれのご講演も新しい知見に富み、参加いただきました方々には関心をお持ちいただけたものと思います。次回の関西支部研究会にもぜひ期待してください。



◇ご講演の概要

武庫川女子大学 篠塚和正先生：「顔に作用する薬のお話」と題して、美容分野でシワ改善のために汎用されている医薬品ボツリヌストキシン（実は処方薬を誤ると非常に危険な毒薬）を例に挙げ、「くすりととりすく」の関係性について分かりやすくお話ししていただきました。自然で健康的な美しさを保つために薬学部だからこそできる教育の重要性を熱く語られたのが印象的でした。

武庫川女子大学 森山賢治先生：“顔”を観察するだけで、全身のホルモン状態について多くの情報が得られるなど顔とホルモンの関係についてユーモアたっぷりにお話しいただきました。鬱症状が見られる方に男性ホルモンを投与することで改善が見られた事例や、顔において、成長ホルモンが最後まで効果を発揮する部分は顎であるというお話など非常に興味深いお話しでした。

立命館大学 瀬尾：ディープラーニングを用いた、任意の特徴を付与した顔画像生成手法と、同手法を応用した顔画像解析手法についてお話させていただきました。

ナリス化粧品 浅井健史さん：感性評価に基づくふきとり化粧水の開発事例として、ユーザーが化粧水を評価する際の潜在意識に及ぼす心理構造を可視化し、それを物理計測値と対応させた新しい化粧品開発手法を具体的にお話ししていただきました。
桃谷順天館 石黒陽平さん：見本を重ねてメイクできるスマホアプリ「トレミラ」と、お肌の隠れトラブルを見つけることができる鏡アプリ「肌あれ予報」について開発秘話も交えながらお話ししていただきました。（日本顔学会関西支部 支部長 瀬尾 昌孝）

第24回日本顔学会大会（フォーラム顔学2019）のご案内

■大会日程：2019年9月14日（土）、15日（日）

■大会会場：北海道情報大学（北海道江別市西野幌59-2）

■参加費：一般 5,000円（会員・非会員とも）、学生 3,000円
※当日受付でお支払いください

・大会長：松井 伸也（北海道情報大学）
・実行委員長：向田 茂（北海道情報大学）
・プログラム委員長：藤原 孝幸（北海道情報大学）
・広報委員長：安田 光孝（北海道情報大学）

スケジュール（予定）

●1日目 9月14日（土）

09:30	開場・受付開始
10:20	開会の挨拶
10:30	口頭発表1（4演題）
11:40	ポスター発表1・各展示紹介
12:10	（お昼休み）
13:10	総会
13:40	ポスター発表1・各展示コアタイム
14:40	口頭発表2（4演題）
15:50	口頭発表3（4演題）
17:00	特別講演1 大坊 郁夫 氏 「well-beingを目指す科学としての顔コミュニケーション～日本韓国中国の比較研究を踏まえて～」
18:20	イブニングシンポジウム

●2日目 9月15日（日）

09:00	口頭発表4（5演題）
10:25	ポスター発表2・各展示紹介
10:55	ポスター発表2・各展示コアタイム
11:55	（お昼休み）
12:55	口頭発表5（3演題）
13:50	特別講演2 TELYUKA 石川 晃之 氏、友香 氏 「Virtual Human Projects」
14:50	閉会の挨拶

※2019年度総会は初日13:10から行います。会員の方はご出席ください。
※2日目終了後にサテライトシンポジウム「顔の科学：内側から見た顔」が北海道大学で開催されます。（詳細はHPを参照）

◇詳細はフォーラム顔学2019ホームページをご覧ください。
<http://www.jface.jp/forum2019/>



メンバー募集!

イベントなどでニュースレターを配布・広報いただける場合は、事務局までお知らせ下さい。

発行：日本顔学会 © 編集・製作：日本顔学会 J-FACE 編集委員会 日本顔学会事務局
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 バレスサイドビル 9F 株式会社毎日学術フォーラム内 TEL：03-6267-4550 FAX：03-6267-4555
発行日：2019年8月29日 *無断転載を禁じます。

J-FACE NEWS LETTER

日本顔学会ニュースレター 70号

29 AUGUST 2019 Vol.70 <http://www.jface.jp>

Contents

- P1. Now the Face
- P2. 化粧文化研究者ネットワーク 活動報告
- P3. 日本顔学会若手交流会 活動報告／第56回イブニングセミナー
- P4. 日本顔学会関西支部 活動報告／第24回日本顔学会大会（フォーラム顔学2019）のご案内



第53回 今、を感じさせる KAOの人物を紹介する

第24回日本顔学会大会（フォーラム顔学2019）は、2019年9月14日（土）、15日（日）に北海道情報大学で開催されます。北海道と、本大会の実行委員会を構成した北海道情報大学情報メディア学部、そして顔学にふさわしい2件の特別講演を企画いたしました。

特別講演1は、北星学園大学学長の大坊郁夫先生です。大坊先生は、札幌医科大学の助手、山形大学助教授、北星学園大学教授、大阪大学大学院教授、東京未来大学学長を経て、2018年より北星学園大学学長を務められています。社会心理学、実験心理学の分野で活躍され、特にコミュニケーションの研究に従事されています。顔学会には、魅力と美、化粧という大坊先生を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。特別講演2は、3DCG制作を行うユニット「TELYUKA（テルユカ）」のお二人です。TELYUKAは、石川晃之・友香ご夫妻による3DCGアーティストユニットです。1998年頃より、CG制作プロダクションでゲーム・映像を中心に3DCG



大坊 郁夫 氏
Ikuo Daibo

制作を行うCGアーティストとしてのキャリアが始まり、2011年、TELYUKAとしてユニット活動を始められました。そして、2015年、CG業界では、「不気味の谷を越えた!!」と話題になったCGキャラクター「Saya」を生みだしました。そんな、3DCGの歴史を変えたお二人です。

■特別講演1：well-beingを目指す科学としての顔コミュニケーション～日本韓国中国の比較研究を踏まえて～
講師：大坊郁夫（北星学園大学 大学・短大共通 学長）

顔の形態特徴には、民族的特徴などの要因や時代変化が表れる。さらに、人は自民族の特徴には敏感であるが、社会的、心理的距離の遠い民族の特徴の解釈には、感受性は低い。加えて、社会的脈絡における顔部位の手がかりの優位性は異なり、それは自己呈示の手段としての化粧行動へも大きく影響する。この観点から、日本、韓国、中国の顔特徴の研究が、社会的、文化的な円滑な関係にどう貢献できるのかについて考えたい。

■特別講演2：Virtual Human Projects
講師：TELYUKA 石川 晃之、石川 友香（3DCGアーティスト）

私たちの造るバーチャルヒューマンは、人間が人間という現実（リアル）を観察、触知、体験し、そこから得たエッセンスをデジタルデバイス上に少しずつ時間をかけて再現してきました。こうして、従来ながらのアーティストによるハンドメイドで生まれた彼女は、「ゆらぎ」と不確実性を持ち、独特の有機感を持った新しい個性として人間とは違う存在感を獲得してきました。今回はこういった流れで制作が行われてきたのか事例を交えながら、人々の持つ印象から作り出したSayaの顔の制作を中心にご紹介いたします。



TELYUKA
石川 晃之 氏、石川 友香 氏
Teruyuki Ishikawa and Yuka Ishikawa

（第24回日本顔学会大会 大会長 松井 伸也）

化粧文化研究者ネットワーク 活動報告

■第50回研究会「化粧品の科学技術史」

日時：2019年3月11日（月）14：00～16：30

講師：南野 美紀 先生（㈱ベルヴィーヌ 取締役副社長）

場所：大阪樟蔭女子大学（大阪府東大阪市）

南野先生は化学の研究者であると同時に、化粧品会社の経営者としても活躍されており、今回は洗顔料の歴史、乳化技術の発展、皮膚科学、メイクトレンドなど、技術史からマーケティングまで幅広い分野にわたるお話をうかがった。

現在、日本の化粧品市場は約二兆円規模といわれ、UVケアや美白、シワ対策など、日本女性の化粧品への期待感が高い。先生によると、化粧品に効果効能を求めるのは、日本をはじめアジアにみられる傾向で、欧米では医薬品に向かうそうである。

消費者の品質へのこだわりが厳しい日本の化粧品は、世界に誇れるレベルにある。IFSCC（国際化粧品技術者会連盟）アワードを受賞した国別論文数は日本が最も多く、研究分野のすそ野も広い。

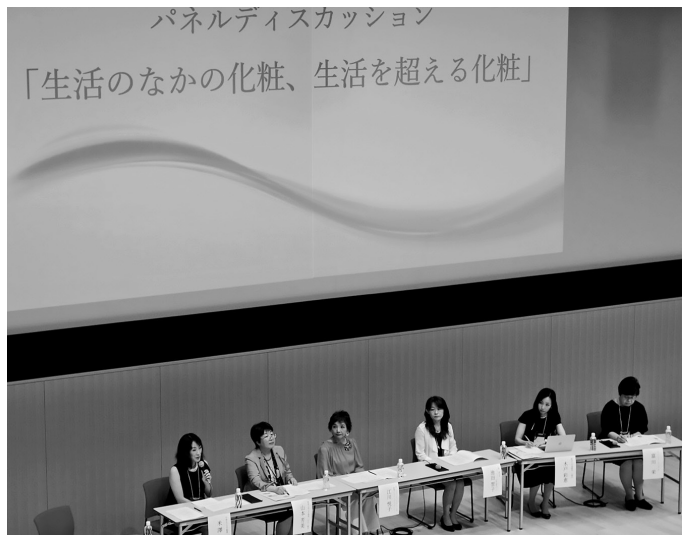
そもそも、日本における近代化粧品の歴史は、西洋文化が流入した明治時代からはじまった。技術は綿々とつながって、各時代のニーズに合わせたコンセプトの商品を生み出し続け、今に至っている。

平成の傾向として、機能性をうたった商品が目につくが、その理由として、新規でよい商品だとアピールするために、技術が重視されるようになったことが背景にあるという。新規有効成分の開発など「技術のエビデンスを持った製品」で

■化粧文化研究者ネットワーク研究会開催50回記念講演会「化粧文化研究の未来を考える」

日時：2019年6月29日（土）13：30～17：10

場所：資生堂S/PARK（資生堂グローバルイノベーションセンター）



研究会の通算50回を記念し企画した本講演会、当日は100名を超える化粧文化に関心をもつ参加者にお越しいただき、とても賑やかな会となりました。

講演会では、はじめに基調講演として、ネットワーク代表の立教大学 北山晴一名誉教授が「ひとはなぜ化粧をするのか 化粧文化研究の広がり」についてお話くださり、基本的視座を全体で共有しました。続いて、「化粧文化と化粧文化研究の現場から」として3名の先生方にご講演いただきました。



あることは、現代の化粧品において大きな訴求ポイントになっているのである。それは、効果効能をすぐに実感できる美容医療が身近になってきた現状を考えると納得できる。

一方で、既にある処方をPRを含めて新しい切り口で展開することにより、ヒット商品が生み出されるケースもある。日本で人気があるKコスメ（韓国コスメ）のBBクリームやクッションファンデがこれに該当する。新規成分開発に頼らずとも、工夫によってヒット商品が生まれる余地は、まだまだあるのである。

近年、中国などアジアの技術の進歩もめざましい。今後の課題は、日本ブランドの力をどう保ち続けるかであり、そのために必要なのは、よりよい商品を生み出そうとする情熱と信念、そして後進の教育が大切だと締めくくられた。

化粧品が化学（科学）の産物であること、そして日本の化粧品がアジアなど他国の評価が高い理由を、わかりやすく紐解いていただいた研究会だった。

（山村 博美）

都留文科大学 山本芳美教授からは「変える・彩る 顔と身体」と題して、台湾でのフィールド（＜現場＞）ワークに基づく知見をご紹介いただきました。特殊メイクアップアーティスト 江川悦子さまからは「美しく加齢メイクをつくる技術」と題して、その人らしさを残しつつ老いをつくる技術について＜現場＞での写真をもとにご説明いただきました。資生堂グローバルイノベーションセンター 池田智子さまからは「お客さまに寄り添うモノづくり」と題して、商品開発の＜現場＞での研究テーマ決定の仕方と、お客さまのニーズ研究から開発された商品の実例をご紹介いただきました。

最後に、パネルディスカッション「生活のなかの化粧、生活を超える化粧」として、甲南女子大学 米澤泉教授をモデレータとし、上記講演者3名の先生方に加えてビューティークリエーター 富川栄さま、そして私（筆者）が加わる形で議論を行いました。パネルディスカッションでは、化粧行為の近年の動向や、化粧に関連するテクノロジーの普及による想像力の広がりが話題になりました。特に、近年ではボーダーレス、ジェンダーレスなどという言葉に表されるように、文化のボーダー（境界域）が曖昧になりつつあります。こうした社会的動向をうけて、人の身体表象のあり方が問い直されることも多くなってきました。ボーダーは、意味と意味が交渉しあい、個々人の価値観が多様化し、さらに問い直される＜現場＞です。こうした境界域における新たな身体表象について丁寧に向き合うことが化粧文化研究の未来を考えるためには不可欠だということに、議論を通して気づかされました。

（木戸 彩恵）

日本顔学会若手交流会 活動報告

■第16回若手交流会

2018年7月22日（日）に、早稲田大学西早稲田キャンパスにて早稲田大学の中村航洋先生による『顔印象を科学する一印象を測る・操作する技術の開発を目指して』と題した講演が実施されました。近年に注目を浴びる美の知覚と脳の関係や、顔特徴と美の関係など、顔印象・魅力に関連する研究を紹介した後、顔の特徴をモデリングできるツールを用いた顔特徴と印象評定間の因果関係について解明した結果の紹介がありました。例えば、女性の場合には目が大きく、肌のトーンが明るく、鼻翼が狭い顔が魅力的に感じ取られやすいという、一般的な認識に近い傾向が見られるとのことでした。顔の印象や魅力度の読み取りについても興味深い講演でした。



■フォーラム顔学2018

日本顔学会の年次大会「フォーラム顔学2018」に参加し、若手交流会の年間活動報告と有志メンバーによる共同研究発表の2件の発表を行いました（詳細は若手交流会HPをご覧ください）。共同研究発表では徐昺哲と瀬尾昌孝による「深層学習を用いた観察者特性に応じた顔の印象評定予測」と題した成果発表を行いました。「顔特徴だけでなく、評価者の性格特性も考慮した印象評価」を目的として、Deep Learningによ

第56回イブニングセミナー

「1にりんかく、2にめもと」

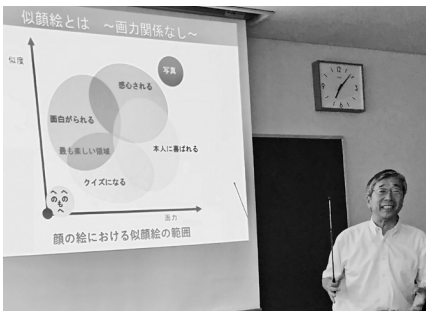
（「似顔絵を楽しむ」シリーズ第1回）

日時：2019年5月20日（月）18：00～20：30

講師：橋本 憲一郎 先生（似顔絵デザイン）

場所：中央大学駿河台記念館

私を似顔絵に引き込んだものは週刊朝日の「山藤章二の似顔絵塾」です。投稿を重ね「作品賞」をいただき「特待生」にもなりました。似顔絵塾には「絵画派・毒絵派・記号派」など様々な投稿者が集いますが、私自身は「キャラクター派」ということになるでしょう。山藤塾長は「似顔絵は「モデル」と「絵」という2つの円のズレを楽しむゲーム」と定義しています。2つの円がぴったり重なると写真や肖像画になります。似顔絵は本質的なところを押さえてさえいれば重なる部分が



僅かでも（全部が似ていなくても）良いのです。また私見ですが、画力と似度の両方とも高い似顔絵は感心こそされますが、写真や肖像画のようで似顔絵として

る解析手法を提案しました。また研究テーマ自体も関心を持ちやすいものであったため、多くの方々と意見交換をすることが出来ました。



■第17回若手交流会

2018年11月11日（日）、レンタルスペース WINCOVEにてポーラ文化研究所の富澤洋子さんを講師に迎え、『浮世絵の「顔」に見る江戸の化粧情報』と題した講演と、浮世絵に描かれた江戸時代の化粧道具や化粧品の実見及び本紅体験が行われました。浮世絵から当時の化粧情報をよく読み取れる紹介をしてくださり、江戸時代の化粧体験では歓声があがりました。紅は染料であるため地の色がかすかに見え、雰囲気が大きく変化して現在の一般的な化粧品とは異なる非常に新鮮な体験でした。

若手交流会では、2019年の秋に節目となる第20回定期交流会を計画していますので是非ご参加ください。

（徐 昺哲）



の面白みはありません。画力も似度も中間くらいのレベルで面白い似顔絵が生まれるようです。似顔絵は「モデル」「描き手」「見る人」のトライアングルによって成立し、「モデル」にとっては描いてもらう喜び、「描き手」にはうまく描けたときの満足感、「見る人」にはモデルがわかったときの爽快感が似顔絵の面白さと言えるでしょう。

「似顔デザイン流」の似せかたとしては、（1）よく観察して本当の顔を見極める、（2）面影（目鼻口の配置）を的確にとらえる、ことが重要です。そして最後に（3）「毒」（風刺性）を入れる、ことで似顔絵は完成します。

なお、上記の講演要旨は著者（＝城戸崎）がまとめたものです。セミナーの最後には、福笑い形式の『似顔・来た来たあ～体験ツール』が参加者全員に配布され、眉、目、口

などのパーツを動かすことで「似ている」と「似ていない」の境界を行き来し、「似て来たあ～」という達成感を体験することができました。

（城戸崎 雅崇）

